

表 5 Bile acid concentrations in the serum of patients with congenital biliary atresia ($\mu\text{g}/\text{ml}$)

No.	Name	Sex	Age	LC	DC	CDC	C	Total	C/ CDC	GOT	GPT	Al- P	LAP	γ - GTP	T- Bili.	D- Bili.	CCLF	
1	Y. N.	F	27d 46d	4.85 5.06	2.35 1.25	9.63 14.0	6.74 4.45	23.57 24.81	0.70 0.32	139 167	103 96	30.4 32.0	405 702	316 412	18.5 25.2	9.8 12.2	— —	on admission Ope. 4 days
2	T. M.	E	5m 6m	1.11 4.88	— —	8.69 23.60	6.07 10.3	15.87 38.78	0.70 0.44	162 176	149 109	34.6 30.9	806 616	430 420	10.6 18.5	7.2 10.1	+	on admission Ope. 27 days
3	M. H.	E	50d 88d	6.12 9.08	— 2.90	23.80 5.70	3.55 4.74	33.47 21.79	0.15 0.93	180 285	106 170	42.2 23.2	377 482	230 426	13.4 18.6	9.8 12.2	— —	on admission Ope. 32 days
4	R. M.	F	50d 87d	3.16 5.65	1.03 2.44	12.30 18.50	4.85 12.20	21.34 38.79	0.39 0.66	170 127	125 157	30.8 23.7	470 595	220 155	17.6 13.0	11.8 8.5	— +	on admission Ope. 27 days
5	Y. I.	F	46d 96d	— —	— —	13.30 29.70	13.60 20.70	26.90 50.40	1.02 0.70	119 95	82 53	57.1 58.2	311 343	196 158	10.0 7.0	6.7 4.2	— —	on admission Ope. 29 days
6	K. S.	F	20d 36d 50d 3m 4m	0.13 0.35 — — —	0.96 0.14 — — —	4.63 8.01 — — —	11.30 14.90 23.40 14.00 11.24	17.02 22.70 38.80 25.20 28.58	2.44 1.86 1.41 1.25 0.65	118 74 89 126 140	92 41 46 90 90	26.6 19.8 17.4 30.5 45.5	479 294 494 726 890	198 132 239 456 512	16.8 8.4 12.0 21.5 22.5	10.2 5.4 6.6 12.0 14.5	— — +	on admission Ope. (-) 〃 〃 〃

なら、硫酸抱合させより早く尿中へ LC を排泄させたり、 LC をラットのように毒性の少ない muricholic acid に

させたり、出来れば、両疾患の根本的治療にもなると考えている。

研究報告

東京大学医学部病理学教室 森

亘

過去3年間における研究の主たるものは、大別して以下の3項目とすることが出来る。

1. 小児肝疾患、殊に先天性胆道閉鎖症ならびに乳児肝炎の病理組織学的研究：これら両疾患は本来別々のものと考えられているが、病理組織学上その肝臓所見には互いに区別し難い点が多い。従って、それらの間の異同を明確にし、また出来得ればその病因探究の一助にもしたいと考えてその病理組織学的検索を行った。先天性胆道閉鎖症については肝臓ならびに胆道の両者についての観察が行われ、その前者では一般的組織所見解析の他に、殊に特異な形態を示す胆栓の形状について精細な観察を試みた。その一部のものは明らかに一般的の胆栓とは異なり、あたかも壁の細胞が変性に陥って脱落したかの如き印象を与える、甚だしいものでは巨細胞封入体ウイルス症に際してみられる封入体に極めて類似の像を呈した。しかしながら電顕その他の方法を用いた検索の結果、これらが該封入体であるとする証拠は得られなかつた。また胆道系については一部症例の連続切片を作製し、閉鎖部位前後の状況を観察、其処に炎症の名残りとも云うべ

き組織変化の見られることに注目した。かつ、その附近に巨細胞封入体ウイルス症に際して認められると全く同様の大きな封入体を確認し得た例が数例あり、その病因としての役割はまだ不明ながら今後の研究指針を与えられたものと解釈された。

一方、乳児肝炎の症例においては肝臓の検索が専ら行われたが、そのうち胆栓については前述の先天性胆道閉鎖症に見られたと同様の所見を得た。また、一般的病理組織学的観察の結果としては経時に眺めた所見の解析において些かの収穫が得られ、初期には巨細胞化が強く、遷延する例では末期に線維化が著明になるという。今迄漠然と考えられていた事実を確認することが出来た。

これらの結果、病理組織学的にはこの両疾患はあるいは一つの病因による可能性もあると思われ、可能性の一つとしては巨細胞封入体ウイルス症を想定して居りながらも、未だ明確な結論を得るには至っていない。

2. 小児肝疾患に際しての α -フェトプロテイン上昇程度： α フェトプロテイン (AFP) は当初原発性肝臓癌、殊にヘパトーマにのみ選択性に陽性に出るものと思われ

ていたが、その後の研究により癌以外の肝疾患、あるいはヘパトーマ以外の癌にも稀ならず陽性成績がみられることが判明した。胎児期には、生理的にも極めて高濃度に認められることも関連するのか、乳幼児の肝病変に際しては癌以外でも可成り高値を示すことに注目、子供の肝疾患患者について検査、集計した。その結果、乳児性肝炎、肝芽腫、先天性胆道閉鎖症などについては何れも相当に高値を示すことが確認され、その程度はヘパトーマ以外の成人諸症例に比して高率、かつ高値であることが分った。肝異常にに対する小児期特有の反応と見なしえるであろう。

3. 肝炎の予後としての肝硬変、肝癌：最近、肝炎の予後、特に肝癌発生との関係が論じられる様になった。若しこれら両者間に密接な関連ありとすれば、肝炎罹患後肝癌発生までには相当の長期間を要すると考えられ、従って小児期に肝炎に罹患することが成人後の発癌に対しても大きな影響を与えるかねない。このような背景の下に、剖検例についてそれらの中どれ程肝炎の痕跡を見得るかを調査しつつあるが、その一環として、今回は1974、1975両年ににおける肝硬変症、ヘパトーマ症例剖検例を材料とし、肝炎の既往、黄疸の既往生前の臨床検査

における HB 抗原検出率、などの点を指標として解析を行った。

材料として用いた症例は一般的肝硬変症に属するものの55例で、内30例がヘパトーマを合併していた。先ず肝炎の既往は全肝硬変症例については55例中10例(18.2%)、ヘパトーマ症例では30例中4例(13.3%)認められ、次に黄疸の既往は全肝硬変症例55例中14例(25.5%)、ヘパトーマ症例30例中6例(20.0%)にみられた。さらに、血清中の HB 抗原は、全肝硬変症例55例中15例(27.3%)に陽性、またヘパトーマ症例30例中9例(30.0%)に陽性であった。以上のうち、何れか1つでも所見が認められたものは、全肝硬変症例55例中28例(50.9%)、ヘパトーマ症例30例中14例(46.7%)であった。

すなわち、此迄に取り扱われた症例(剖検例)に関しては、ヘパトーマ合併の有無にかかわらず、一般的肝硬変症々例の約1/2に肝炎の痕跡らしきものを見る事が出来た訳で、この値は検査法の発達などに伴って更に上昇する可能性があるが、現在の段階でも1つの参考となることは確かであろうと思われる。とは云え、他の諸条件をも加味して、今日、肝炎とヘパトーマの間に直接の関係が存在しているとするに十分な証拠とは云えない。

先天性胆道閉鎖症における

アルファフェトプロテイン値について

班 員 東京大学小児外科 齋 藤 純 夫
協力者 // 土 田 嘉 昭

先天性胆道閉鎖症、新生児肝炎、或いは、他の新生児閉塞性黄疸においては、血清アルファフェトプロテイン(AFP)値が高値を示すことが報告されており、さらに、Zeltzer, Fonkalsrudらの報告によれば、その血清 AFP 値の如何により胆道閉鎖症と新生児肝炎との鑑別が可能であると言う。このようにアルファフェトプロテインは両疾患の病態生理を解く鍵の一つとして、或いは、鑑別診断上の一手法として注目を集めつつあるが、生後2～3カ月の乳児においては、生理的にも AFP 値は高値を示すので、正常値との比較なしにこの問題を検討することは無意味といつても過言ではない。

このような見地から、我々はまず乳児期におけるアルファフェトプロテインの正常範囲を求め、別に測定した先天性胆道閉鎖症13例、新生児肝炎1例、計14例の AFP 値をこの正常範囲と対比させ、各症例が示した AFP 値の意味づけを試みた。

I. 研究方法

生後26日より14才までの外ソケイヘルニア患者で、先天性心疾患、気管支喘息、てんかん、Hurler-Hunter 症候群等の基礎疾患を持たない患者45名を選び、その血清アルファフェトプロテイン値を radioimmunoassay 法に

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文書認識)ソフト使用 ↓

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

過去 3 年間における研究の主たるものは、大別して以下の 3 項目とすることが出来る。

1. 小児肝疾患、殊に先天性胆道閉鎖症ならびに乳児肝炎の病理組織学的研究：これら両疾患は本来別々のものと考えられているが、病理組織学上その肝臓所見には互いに区別し難い点が多い。従って、それらの間の異同を明確にし、また出来得ればその病因探究の一助にもしたいと考えてその病理組織学的検索を行った。先天性胆道閉鎖症については肝臓ならびに胆道の両者についての観察が行われ、その前者では一般的組織所見解析の他に、殊に特異な形態を示す胆栓の形状について精細な観察を試みた。その一部のものは明らかに一般的の胆栓とは異なり、あたかも壁の細胞が変性に陥って脱落したかの如き印象を与え、甚だしいものでは巨細胞封入体ウイルス症に際してみられる封入体に極めて類似の像を呈した。